

## 夫婦ダイアド・データからみる父親の家事・育児行動の諸相

斉藤知洋 (国立社会保障・人口問題研究所)

### 1. 問題の所在

父親の家事・育児行動は、家族研究のみならず、こども・子育て政策や少子化対策をめぐる議論の中で近年注目を集めている指標である。一方で、日本国内の学術調査の多くは、夫婦のどちらか一方から父親(夫)の行動頻度や時間量を測定しており、そのことが調査間で得られる実証的知見の異同をもたらす要因として指摘されている(Kamo 2000)。同一の指標を個人ではなく、夫婦や親子などのダイアド単位で測定することは、測定誤差といった方法論的課題の他にも、家族関係の質、ならびに家族成員間の認知のズレや共通行動の形成メカニズムを理解することにも繋がることから、国外ではダイアド・データを用いた実証研究がいち早く蓄積されてきた(Barnett et al. 1993; Kamo 2000; Mikelson 2008; Naujoks 2024)。本報告では、全国規模の確率標本設計に基づいて収集された日本の夫婦ダイアド・データを用いて、父親の家事・育児行動に関する①夫婦間の回答の一致/不一致度とその規定要因、②測定単位・方法による分析結果の差異について検討を行う。

### 2. データと方法

使用するデータは、2025年2月～3月に実施された「子育て世帯にやさしい社会づくりに向けた全国調査」である。本調査は、2023年に生まれた日本全国の子ども3,200人を住民基本台帳より無作為抽出し、その親に対して回答を依頼した(オンライン回答と質問紙調査の併用)。調査対象のうち半数は、母親と父親双方に対して調査票を配布しており、同一夫婦の回答情報を結合したダイアド・データを構築することが可能である。母親票・父親票をともに送付した対象ケースの回収率(回収数)は、母親57.3%(916票)・父親42.4%(677票)であり、マッチングに成功した夫婦は616組であった(調査の詳細は第1報告(佐々木)を参照のこと)。

父親の家事・育児行動は、母親票・父親票において、1週間あたりの遂行頻度をそれぞれ5項目について尋ねている(家事:「日用品・食料品の買い物」「部屋の掃除」「洗濯(物干し・取入れ、収納を含む)」「食事の準備」「食後の片づけ」、育児:「おむつを替える」「風呂に入れる」「食事をさせる」「寝かしつける」「絵本を読み聞かせる」)。五件法から成る各項目を、1週間あたりの回数(「毎回・毎日=7回」「週3~4回程度=3.5回」「週1~2回程度=1.5回」「月1~2回程度=0.75回」「ほとんどしない=0回」となるように連続変数化した。分析は、これらの父親の家事・育児項目について夫婦双方から有効回答が得られた567組を中心に行った。

### 3. 結果

はじめに、父親の家事・育児頻度に対する同一夫婦間の回答の類似度(一致度)を項目別に確認した。その結果、Pearsonの相関係数(pairwise)は、家事で.494~.712、育児で.524~.709であり、回答一致率も家事で47.1~54.3%、育児で48.5~63.5%にとどまった。平均値で見ると、夫は妻に比べて自身の家事・育児頻度をそれぞれ0.55回、0.57回ほど多く評価する傾向にあり、とくに「食後の片づけ」(家事)や「風呂に入れる」「食事をさせる」(育児)で乖離が大きい。つぎに、夫婦間の回答不一致をもたらす個人・家族的要因をマルチレベルモデル(dyadic discrepancy model)をもとに検討したところ、妻が大卒であり、妻が夫婦関係満足度を高く評価する夫婦ほど、父親の育児頻度に関する回答の乖離が小さい傾向にあること等が明らかとなった。しかしながら、家事については夫婦間で回答不一致が生じる系統的なパターンは看取されなかった。

大会当日は、最新のデータセットを用いた分析結果を示す。さらに、複数の方法で父親の家事・育児頻度を指標化することで推計値にどの程度の影響がみられるかについて、他の家族関連指標(追加出生意欲など)を従属変数とした多変量解析の結果も併せて報告する。

本研究はJSPS 科研費23K25587(代表:佐々木尚之)の助成を受けたものです。

(キーワード:ダイアド・データ、父親の家事・育児、回答不一致)